

61 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 3 4 5

特231

770

黒木御所

始



増231  
770

# 黒木御所

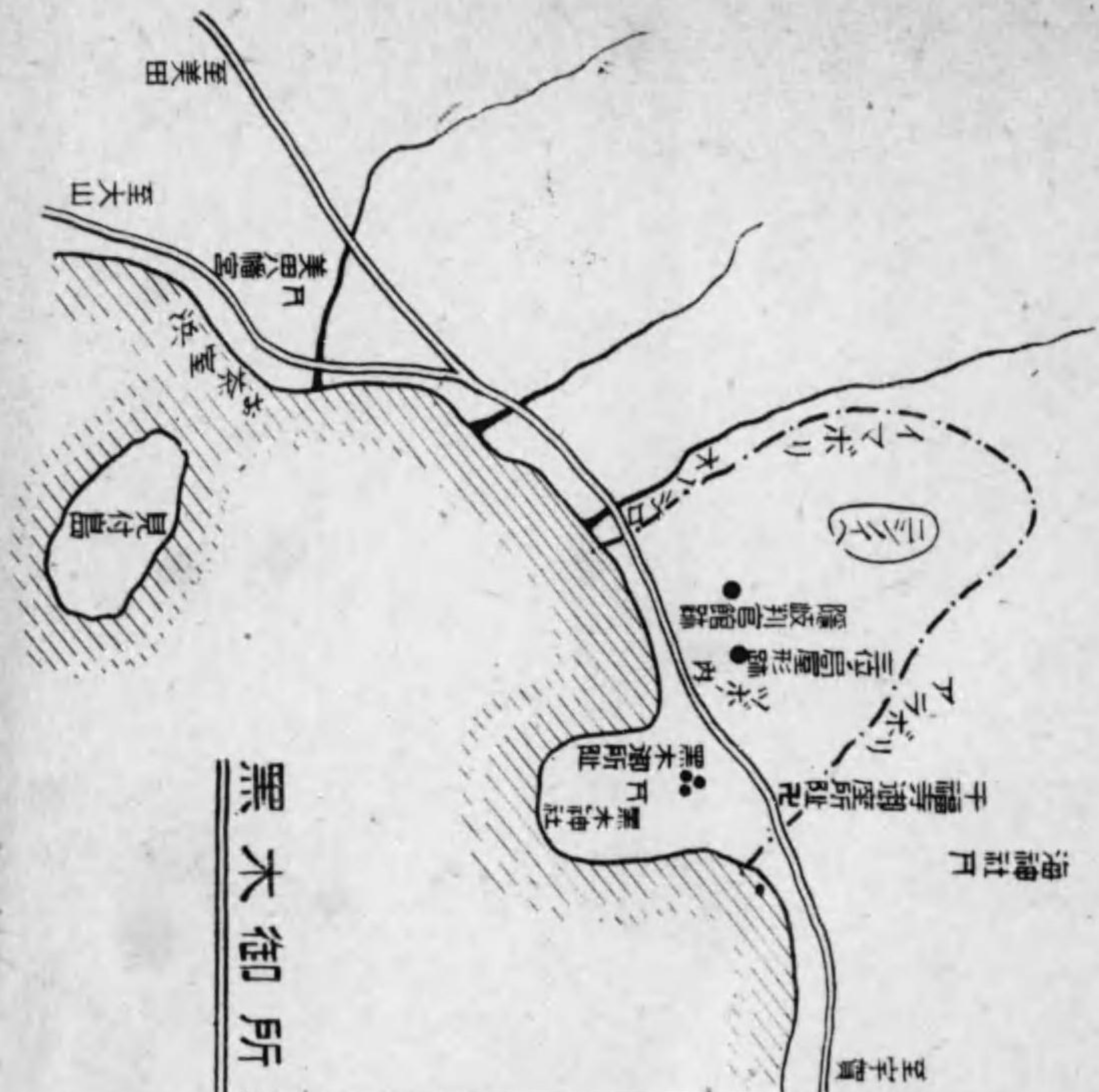
黒木村教育會

本編は本村國民學校兒童のため  
に本會事業として聖蹟に關する  
郷土の傳説を採つて編纂したも  
のである。

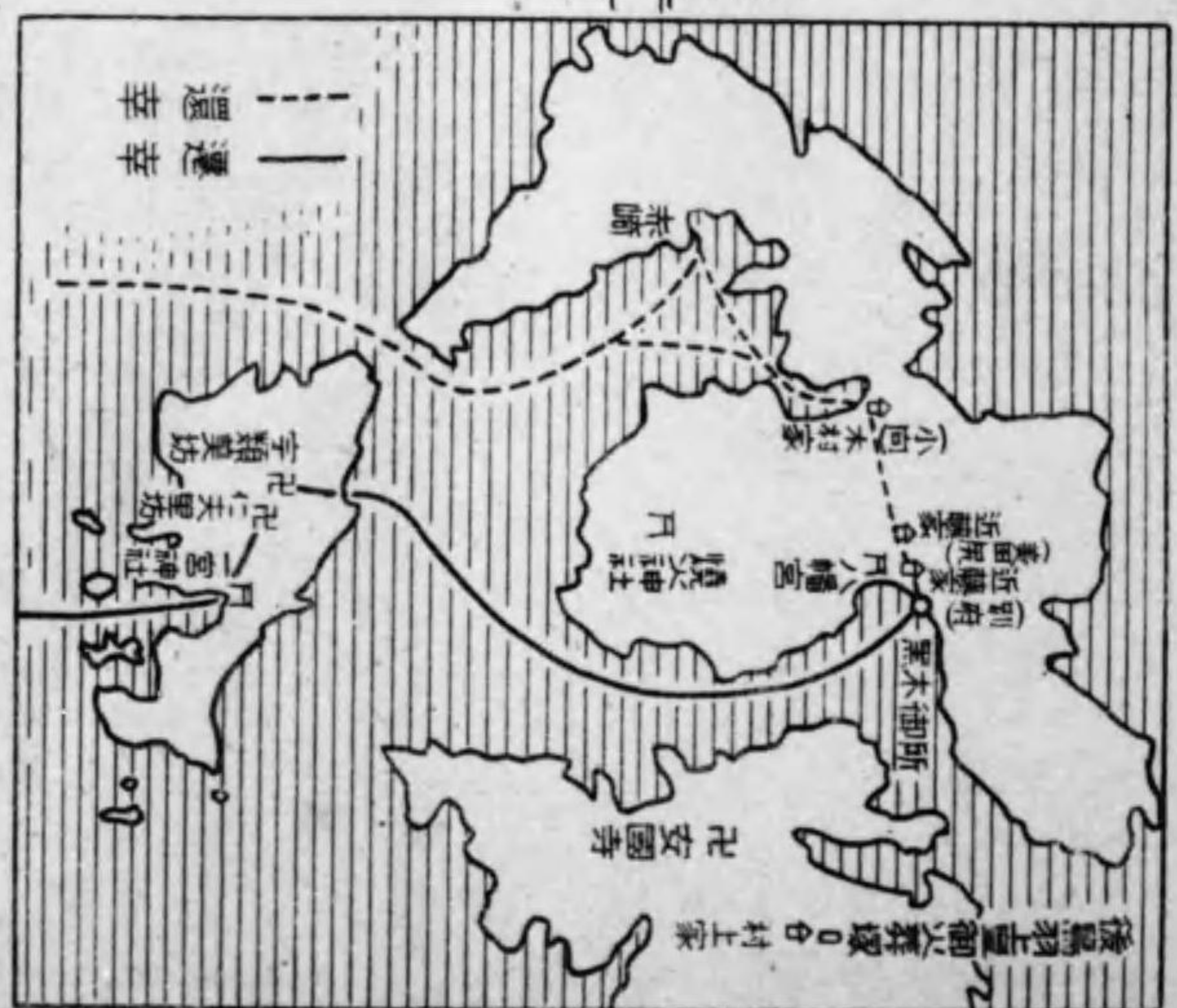
本書編纂にあたり安藤村長の斷えざる御  
激勵と御支援をいたゞき又出版について  
本村出身宇野正盛氏(在東京に多大の御盡  
力を辱うした。本書の世に出る、全く兩氏  
の御熱誠によるものと感謝に堪へない。

昭和十八年十二月一日

黒木村教育會



黒木御所附近



黒木御所

目次

一、後醍醐天皇……………一  
    北條氏の無道……………一  
    遷幸……………二  
二、黒木御所……………四  
    御在島一ヶ年……………四  
    還幸……………七  
三、建武中興……………九  
四、黒木神社……………一〇  
五、史蹟……………一二

六、兩度の行啓……………一六  
    (一)明治四十年六月四日……………一六  
    (二)大正六年七月七日……………一八  
    (三)記念行事……………一九  
    (四)奉迎歌……………二〇  
    (五)行啓記念歌……………二〇  
七、黒木御所の歌……………二二  
(附) 後醍醐天皇年表

## 黒木御所

### 一、後醍醐天皇

後醍醐天皇は御名を尊治たかばと申し上げ、御年三十一歳で御位にお即きなされた。御生れつき御聰明であらせられ、學者を召されて廣く學問をお修めなされた。さうして御心を深く政治にお注ぎなされ、早くから後鳥羽上皇の御志をついで政權を朝廷へかへさせようとお考へになつてゐられた。

北條氏の無道　その頃、幕府では北條高時が執權となつてゐたが、性質がおろかで少しも政治に力をいれなかつた。そこで天皇は一日も早く政治を朝廷にとりかへして、萬民を安んじようとの御心から、ひそかに諸國の武士どもをお召しになつた。ところがこの事がいつのまにか鎌倉に聞え、高時は大いに驚き急いで兵を京都へ上らせた。御志が意外にも漏れたので、天皇は山城の笠置山に行幸なされたが、間もなく賊軍は笠置に迫り、これを

おとし入れてしまつた。

天皇は藤原藤房以下僅か二三の朝臣を従へられ、更に赤坂城さしてお出ましになつたが、賊兵のため遂に隠岐へお遷うつされになることゝなつた。申すもまことにおそれ多い極みである。

遷幸 いよいよ三月七日京都をお立ちになつたが、無道な高時は天皇の御供として一條行房、六條忠顯、三位の御局等僅か數人を御側づかへとして許したばかりで、鎌倉武士どもが大勢粗末な御輿の前後左右を警固し奉つた御行列であつた。道々この御幸みゆきを拜する民草たちは涙を流して御見送り申し上げたといふことである。

天皇は住み馴れた都への御名残りもつきさせられず、

終にかく沈み果つべき身とならば

上なき身とは何生れけん

いさ知すなほうきかたの又もあらば

この宿とても忍びやもせん

とお詠みなさつた。

この時、皇女瓊たま子内親王は御年十六であらせられたが、いかにもして御父君に従ひまつらうと、三位の局の女童めのむすこにお姿をかへさせられ、そつと御供の中にお入りなされた。しかし武士どもの見張りが厳しいので御父天皇のお姿さへ拜することの出来ぬ悲しい御旅であつた。かうして日數を重ねて伯耆の山市場の里に御着きなされ、始めて御父子の御對面がかなつた。それも武士どもに氣付かれては今までの御苦心も水の泡となるので御心にみたぬ誠にはかない御對面であつた。

いよいよ御船で隠岐へお渡りになる時、警固の武士どもは御供の人々を厳きびしくしらべた。女童に御姿はかへさせられても尊い御身は遂に武士の知るところとなり、内親王は武士どもの袖におすがりになつて御供を泣いてお頼みなされたが、武士どももさすがにおいたはしう思ひながら、鎌倉方を恐れて遂に御止め申してしまつた。

内親王は御船が海の彼方に見えなくなるまで磯邊いそべに泣き伏してお別れ

を惜しまれた

このやうに親しい皇女ともお別れ遊ばされ、物々しい武士どもによつて美保關から御船出なされ、隠岐に御着きなされた。これは實に元弘二年四月二日のことである。

## 一、黒木御所

御在島一ヶ年、隠岐判官佐々木清高は幕府の命によつて、俄造りの行在所を別府の陣屋の附近に地を選んで御造り申し上げた。この地は前に海を控へ、後に堀を作つて萬一に備へ、警固の武士を御所の附近はもとよりのこと、灣内の小島(見付島)にも屯させて警戒おさおさ怠りない有様であつた。御所は丘上にあつて波風ふきすさび、天皇の御慰みになるものは何一つない物淋しい御有様であつた。

天皇はこの御所で、朝夕萬民の上を思召され、附近の千福寺に御開運をお祈りなされ、亦焼火神社に天下の安穩をお祈りなされた。遙に海士の里を



黒木御所跡

お望みなさつては、承久の昔を御偲びになり、又灣内の釣舟を御覽ぜられては

ころざす方を問はばや波の上に

うきてただよふ海士の釣舟

とお詠みなされて都をお慕ひなされた。

十一月になつて京都でめでたい御禊大嘗會などの御祝があるとの事が聞え、一さう淋しいお思ひをなされた。この時京都では悠紀主基の和歌の屏風をかく能書家を探したが、適當の人が見當らないので、隠岐にゐる行房卿を召しかへされたらなどといふ噂が傳つた。これを

聞召めされた。天皇は或日の夕、行房の外御側に人のゐない折、このことをお話になり、汝が都へ歸るやうにでもなれば都のこひしい自分はいよいよ心細いと仰せられてかたへの灯をながめさせられ、大さう物淋しさうな御

様であつた。

この御様子に行房は、どうして自分一人都へ歸ることが出来ませうかと

申上げやうとするけれど、胸が一ぱいになつて何も申上げる事が出来なかつた。

又潮風が荒く吹き、霰の音さへ烈しい寒い夜半、いつならはれたのか山寺の法師のするやうに氷をうち破られ、佛前に閼伽水を御供へになる御様子に供奉の人々は誰も今一度どうかして天皇の御代にかへさねばと思はぬ者とはなかつた。

かうした間に勤皇の將士はあちこちに起つてその勢が次第に強くなつた。このやうすに驚いた北條氏は清高に命じて一層行在所の護りを嚴にさせ警固の武士を増させた。しかし、この武士の中には富士名義綱のやうな勤皇の志を抱い



後醍醐天皇御製碑

てゐるものもゐた。

又早くから御側に仕へてゐた村上行氏や成田小三郎名和悪四郎なども、ひそかに天皇の還幸について苦心し、島前海賊衆の統領である海士の村上助九郎や別府近藤家、美田尻近藤家と相圖つてその機を待つてゐた。

元弘三年閏二月のある日、義綱は警固の當番にあたつてゐたのを幸ひ、女官を通じて天皇に自分の志を申上げたところ、天皇は大さうお喜びになり、いそぎ出雲へ歸り迎への軍を向けるやう取計へと仰せになつた。

そこで義綱は早速出雲に歸り、守護の鹽谷高貞に勤皇の軍を起すやうすすめたが、大義に暗い高貞は義綱のすゝめをきき入れないばかりか、かへつて義綱をとらへて隠岐へ渡らせなかつた。

還幸 天皇は義綱の歸りをお待ちになられたが、なかなかその便りもないので、謀略の洩れることをお案じなされ、勤皇の士と御相談になつて遂に二月二十四日の明方、三位の局の御輿によそほつて、ひそかに忠顯等と御所をお出ましになつた。



幸ひ兩近藤家始め土地の勤皇の人々も、ひそかに御護り申して夜の明けぬ中にと道を急ぎ裏道づたひに小向の里にお着きになられた。天皇はこゝから御船出になり伯耆へ御渡海なされた。いくばくもなく、警固の武士どもはこの事を知つて急ぎ御後を追うたが、遂に追付くことも出来なくて引返した。

伯耆へ御着きになられた天皇は、その地の豪族名和長年をお召しになつた。天皇のお召しを受けた長年は大いに感奮してすぐに一族と共に、この上もない名譽である。たとひ屍を戦場にさらさうとも君の御ために盡し奉らうと申し合せ、兵を集めて船上山の行宮を御守り申し上げた。

佐々木清高は、この時出雲に渡つてゐたが、この事を聞き手下の兵三千余騎をひきゐて名和氏を攻めたが、かへつて義綱等の軍に打破られて引きしりぞき、再び隠岐へ歸らうとした。ところが、勤皇の志に燃えてゐる島前海族衆はこのとき力を合せてこれを拒んだので遂に窮して敦賀の方へ逃れた。

### 三、建武中興

天皇は直ちに諸國に命をお下しになつて京都御回復を御企てになつた。かねて勤皇の志ある諸國の將士はあちこちに起つて力を合せて賊軍を討ち六波羅をおとし入れた。そこで天皇はさつそく船上山を御立ちになり京都へお向ひなされた。

又一方、新田義貞等の奮戦によつてさしもの鎌倉も陥り、とうとう鎌倉幕府も亡びてしまつた。

天皇は京都へ還幸の道でこの事を聞召めされて大さう御喜び遊ばされ兵庫まで御出迎の楠木正成を前驅として京都に還幸なされた。

かうして政權を御回復なさつて建武中興の新政をみそなはしたまうた。しかしまもなく建武の中興は逆臣足利尊氏のためにくつがへされ、天皇はやむなく吉野に遷幸された。

さうして日夜朝威の御回復を圖られたが、なかなか御心ゆかぬ事ばかり

り多くお淋しい中に延元四年八月九日、かりそめの御病床につかせられ、全山僧徒の祈禱もかひなく御病重らせられ、八月十五日御位を皇太子義良親王にお譲りになされて、翌十六日(太陽曆九月二十七日)御年五十二歳で吉野行宮に崩御あらせられた。崩御の際には御剣をとらせられ「朝敵をことごとく滅し四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり」と御遺詔あそばされた。民草の上を思召されて

世治り民やすかれと祈るこそ

わが身につきぬ思なりけれ

と仰せられた御製を拜しても、御仁慈の程まことにおそれ多く今日、尙、心をうたれないものはない。

#### 四、黒木神社

黒木神社は後醍醐天皇の御徳を御慕ひ申した村人達が、天皇の御神靈を御祀りした御宮で幾百年の間毎年祭祀を行ひ村民絶えず参拜し崇め奉

つてゐる。

創建の年月日は明かでないが正徳三年八月再建との棟札があり、その後度々修理改築が行はれて来た。明治三十年頃から社殿の改築が企てられ、三十六年には具體的に隱岐全島の有志が發企人となつて時の知事、島司や縣内多數の賛助を得て内務大臣の許可を願つてその實現を圖つたが、三十七年日露戦争が起つたのでこの企は中止となつた。

今の社殿は昭和十四年、大阪の小西久兵衛の篤志によつて造られたもので拜殿は翌十五年の建造である。

明治四十年六月四日、大正天皇皇太子の御時、大正六年七月七日、今上陛下皇太子にましますし御時、ここに行啓御参拜遊された。それから六月四日を例祭日とし、兩度の行啓記念日には記念祭典を行ひ御神靈を御慰め申してゐる。

建武中興六百年祭には隱岐島神職會主催で全島の神職多數の官民が集つて盛んな記念式典をとり行つた。

## 五、史蹟

### (一) 黒木御所址

黒木御所址は別府灣の東端に突き出た小丘陵にあつて、承久の聖蹟勝田山や安國寺と相對し、眺望のよいところである。昔から天皇山ともいつて村人は近年まで跣足でなければ參拜しなかつたほどである。

御所址は玉垣をめぐらし中央に比田井天來氏の謹書した「黒木御所址」の碑が立てられ又その傍の御製碑は有馬大將の筆である。

### (二) 千福寺御座所址

黒木御所に程近い所に千福寺といふ眞言宗の寺があつた。當時後醍醐天皇は時折ここに御參詣なされたとの事である。還幸後は天皇の御守本尊を奉安して御冥福をお祈りして來たが、明治初年の廢佛の厄にあつて全く廢れてしまつた。

### (三) 三位局御屋形跡

天皇にお供してゐた三位局の御家のあつたところで今もそのあたりを「局の内」といつてゐる。

### (四) 隱岐判官館址

御所に近い別府灣を見下す臺地にあつて昔出雲から本島を治めに來た判官の陣屋があつたところで、天皇警護の佐々木判官清高もここにゐた。今この邊りを「主の家」といつてゐる。

### (五) 荒堀・今堀

荒堀・今堀は當時警護のため天皇山の北を東西から掘り始めたが還幸のため中止となつた跡である。

### (六) 見付島

天皇警護のため海上を監視した見付所があつた小島でこの名が残つてゐる。

### (七) 兩近藤家

天皇還幸に御仕へ申した美田尻近藤家(重屋)、別府近藤家(御方)は共に昔

からこの地の豪族で島前海賊衆の強豪であつた。

(八) 焼火神社

縣社焼火神社は昔焼火山雲上寺といつて古來島民の崇敬の篤い神社である。

後醍醐天皇御在島中は度々御祈願あらせられ、又御夢告によつてここにあつた毘沙門天像を高野山大樂院へ御上げになられた。社司松浦家には天皇の御宸筆と傳へられる御歌切等の寶物が残つてゐる。

(九) 大山神社

天皇の御祈願のあつた神社で還幸後その御報賽として社領をお下しなされたと傳へられてゐる。

(十) 潜幸御船出之處

小向木村家にある。天皇御舟待の間、御休息遊ばされたと傳へられる御腰掛石がある。又同家には當時から傳つてゐる「愛染明王像」「鳳乳石」等の家寶がある。

(十一) 村上家

海士村中里の村上助九郎家は島前海賊衆の統領で、後鳥羽上皇に忠勤を勵んだ家柄である。後醍醐天皇還幸の謀はここでなされたと傳へられてゐる。

(十二) 安國寺

海士村字西里にあつて足利尊氏が、後醍醐天皇の御冥福を祈る爲建てたものである。明治初年廢佛の厄にあひ廢れてゐたが今は再建されてゐる。

(十三) 赤之江、赤崎

天皇還幸の御時ここから大舟に御乗換へになられたと傳へられてゐる。

(十四) 知夫村の聖蹟

天皇還幸の御時、知夫の港に御上陸、天佐志比古神社(一宮神社)に御休息あらせられ、赤平山にあつた宇類美坊、仁夫里坊といふ寺院にしばし御駐

輦になられたと傳へられてゐる。

今、天佐志比古神社の境内には御腰掛石があり、宇類美坊跡、仁夫里坊跡には記念碑が建てられてゐる。又松養寺(宇類美坊の後身)には天皇御寄進と傳へられる地藏尊がある。

## 六、兩度の行啓

(一) 明治四十年六月四日

明治四十年五月 皇太子嘉仁親王は 明治天皇の御名代として都に程遠い山陰の地へ行啓なされ親しく民草の様子を御覽になつた。

其の時 皇太子は黒木御所趾に御啓の旨を仰せ出された。この有難い思召に感激した村人達は眞心こめて奉迎準備をととのへ御待ち申上げた。

六月四日午後三時御召艦鹿島は香取、磐手などの諸艦を随へ堂々海波をけつて別府灣に入港した。



皇太子殿下御休憩所址

やがて 皇太子には多數の小學校兒童や民草の御出迎の中に御上陸一々御答禮を賜はりながら黒木山へ御登りになられて御休憩所てしばらく御休みの上黒木神社に御參拜、遠く元弘の昔をお偲びになつた。

其の時かたじけなくも社前に羅漢柏あすなろを御手植なされた。間もなく御下山、御召艦で 御鳥羽天皇御火葬塚へ御參拜になつて御歸艦、同夜は別府灣に御假泊あらせられた。

この光榮に感激した村人達は小學校兒童の旗行列をはじめ當地の畜産業を御覽に供したいと駄追を行ひ又輕氣球を揚げ、絶えず煙花はなびを打上げ、夜は提灯行列や海岸一帯に奉祝の燈を灯し、沖には漁火を焚いて滿艦飾の御召艦を取圍むなど心を盡して御旅情をお慰め申し上げたところ御機嫌麗しく有難い御言葉を賜はつたと

いふことである。

明けて六月五日午前六時御召艦鹿島は各艦を随へ民草の奉唱する萬歳の裡に御出港還啓あらせられた。

(二) 大正六年七月七日

大正六年七月 皇太子裕仁親王は山陰沿海行啓の御道筋黒木御所趾行啓を仰出された。再びこの光榮に浴した村人達の喜びはたとひやうもなく感激の中にその日をお待ち申し上げた。

七月七日御召艦香取は供奉安藝を随へ午後二時威風堂々と別府灣に入港した。

この日は朝からの雨降りであつたが艦影が見え始めると煙花が次々に打上げられ奉迎の民草は海岸一帯に人山を築いて心からお迎へした。皇太子は香取から御召艇で海士村にお向ひになり、後鳥羽天皇御火葬塚に御参拜再び御召艇で午後四時黒木御着奉迎の民草に一々御會釋を賜はりながら黒木御所趾へ行啓遊され、元弘の昔をお偲びになつた。

その時長くも黒木神社の社前に檜ひのきを御手植になり御休憩所で暫くお休みの後御歸艦あらせられた。

この有難い思召に感激した村人は、御所附近から絶えず煙花を打上げ小學校兒童は旗行列を以つて御慰め申し上げた。尙又隱岐島名産の「するめ」天然記念物「くろぎつた」を献上申し上げたところ大さうお喜びなされたとの御事である。

やがて午後五時御召艦香取は供奉艦を随へて御出港奉迎の民草は萬歳を奉唱し海路の御平穩を御祈り申上げた。

(三) 記念行事

畏くも僻遠ひきえんの地に二度までも行啓遊されたことは我々村民の光榮この上もない事で、行啓當日をそれぞれ記念日と定め、毎年記念祭典を行ひ、六月四日には國民學校の記念體育會を、七月七日には青少年團在郷軍人會の記念體育會を催して當時をしのび奉り、村を擧げて年ごとに赤子の感激を新にしてゐる。

(四) 奉迎歌

男爵千家尊福作歌 明治四十年作

春のみ山の高々に あふぎて待ちし出ましを  
をろがみまつるかしこさは たとへんことばもなかりけり  
島根あがたの民草の さかゆくさまをみそなはず  
このいでましのかしこさは たとへんことばもなかりけり  
おもへばかしこきけふの日は よき日といはひかたりつぎ  
出雲石見のおきかけて いはひまつらんけふの日は

(五) 行啓記念歌

一、大正六年七月七日 日嗣の御子のいでましを  
をろがみ迎へまつらんと 黒木の廣場は人の山  
二、折りしもとゞろく煙花の音 すはや殿下のいでましと  
一同つゝしみ待つ程に 御ふねははとばに着きにけり

三、まもなく殿下の御上陸 降る雨空をおかし給ひ  
黒木の御所の遺跡をば お訪ねあらせ給ひけり  
四、其の時殿下はかしこくも 今日行啓の記念にと  
社の御前に檜をぞ 御手植あらせ給ひける  
五、あゝこの僻地に二度までも 鶴駕迎へし島民の  
光榮何にかたとふべき 祝へやかしこき今日の目を

七、黒木御所の歌

一、浪風あらしき島の宮 愁の雲にとざされて  
すごし給へる一年餘 時は來りて日月の  
御旗再び翻へる 元弘三年如月の  
二十四日の曉に  
二、八幡の森に還幸と 啼ける鳥も聲高く  
御船を送る一行は 六條、富士名名和、成田

水主楫取を仕ふるは 吾等が島の忠烈士

命はかねてなきものと

三、

船上山にかちどきの

聲はあがりて畏しや

都へかへる鳳輦に

世は治まりて中興の

大業なりぬ日の本に

建武元年やよひ月

聖運ひらくめてたさよ

四、

豺狼の臣時を得て

南風競はず中興の

鴻業破れ雲ふかき

吉野の奥の假宮に

再び潜み給へども

猶撓まざる皇道の

復古の叡慮ぞ尊とけれ

五、

明治維新の大業も

この先蹤のあればこそ

春風秋雨五百年

世は隔たれど遂になる

わが皇道の發祥地

黒木の御所の聖蹟を

仰ぎ奉らん朝夕に

〔附〕 後醍醐天皇年表



# 後醍醐天皇年表

紀元一九四八年（正應元年）御降誕（御宇多天皇第二皇子）  
 紀元一九七八年（文保二年）即位（御年三十一）  
 紀元一九九九年（延元四年）崩御（御年五十二）

紀元	政治	將軍	執權	御事蹟	年號	其他重要事項
一九七八	院政	後宇多	高時	即位（御年三十一）	文保二年	
一九七九	後宇多	高時	高時		元應元年	
一九八〇	院政	後宇多	高時	後宇多法皇院政御中止 天皇親政（十二月）	元享元年	
一九八一	院政	後宇多	高時		二年	
一九八二	院政	後宇多	高時		二年	
一九八三	院政	後宇多	高時		三年	
一九八四	院政	後宇多	高時	北條氏討伐の御謀發覺 （九月 正中の變）	正中元年	
一九八五	院政	後宇多	高時		二年	
一九八六	院政	後宇多	高時		嘉暦元年	

紀元	親政	皇親	天親	醍醐親	時	年號	其他重要事項
一九八七	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九八八	親政	皇親	天親	醍醐親	時	三年	
一九八九	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九九〇	親政	皇親	天親	醍醐親	時	元徳元年	
一九九一	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九九二	親政	皇親	天親	醍醐親	時	元弘元年	
一九九三	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九九四	親政	皇親	天親	醍醐親	時	三年	
一九九五	親政	皇親	天親	醍醐親	時	建武元年	
一九九六	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九九七	親政	皇親	天親	醍醐親	時	延元元年	
一九九八	親政	皇親	天親	醍醐親	時	二年	
一九九九	親政	皇親	天親	醍醐親	時	四年	

後醍醐天皇即位（八月十五日）八月十六日 太陽曆九月二十七日）  
 比叡山行幸（二回）  
 吉野に行幸（十二月二十一日）  
 武者所・雑訴決斷所を置かれた。  
 黒木御所にお着きになった（御年四十五 四月二日）  
 黒木御所をおたちになり（閏二月廿四日）船上におうつりになった（閏二月廿八日）京都に還幸（六月五日）

北條高時が光嚴院を立てた。  
 楠木正成が兵を擧げた。  
 兒島高德が天皇を迎へ奉らうとしたが果さなかつた。  
 護良親王が兵をお擧げになつた。  
 北條氏が亡び鎌倉幕府がたふれる。（五月二十二日）  
 護良親王が征夷大將軍になられた。  
 足利尊氏が護良親王を鎌倉におしこめ奉つた。  
 足利直義が護良親王を弑し奉つた。  
 尊氏が鎌倉でそむいた。（十月）  
 尊氏入洛、北畠顯家等が尊氏の軍を破つた。  
 楠木正成戦死（淡川の戦）足利勢再び入洛名和長年戦死。尊氏が光明院を立てた。  
 金崎城が陥つた。  
 北畠顯家戦死（石津の戦）  
 新田義貞戦死（藤島の戦）  
 義良親王が吉野におかへりになつた。（三月）

449  
151

昭和十九年三月十日 印刷  
昭和十九年五月二十日 發行

(非賣品)

島根縣知夫郡黑木村美田國民學校內  
編輯兼 發行所 黑木村教育會

代表者 渡部喜代二

東京都本所區東兩國四丁目八番地

印刷所 黎明調社印刷部

(東京四七三) 柴 伊穗利

島根縣知夫郡黑木村美田國民學校內

發行所 黑木村教育會

終

